

高まる戦争の危機

核軍拡を促すもの

戦争の危機が高まっている。現在の急速な核兵器開発をうながしているもの、それはこの戦争である。この戦争とはどういった必然性、目的を持っているのであろうか。

第二次世界大戦が帝国主義戦争であったことを考えれば、現在、危機が高まっている戦争が、どういったものかは、明白であろう。

現在、帝国主義の時代である。それは、世界の全てが、領土的、経済的、政治的に、帝国主義諸国により完全に分割されている。各帝国主義は、不均等にしか発達しない。しかも、

国内の階級対立、帝国主義と植民地、従属国の対立が激化してゆく中、帝国主義間の対立が激化してゆく。世界の市場、勢力圏の再分割の為の帝国主義戦争が、その打開策となされるのである。

それでは、現在の戦争の危機が、どのようになされているのか。

第二次世界大戦後、世界の中で、絶大な経済力の下でアメリカ帝国主義(米帝)が表われ、その「地位」が相対的に低下した。しかし日帝や西独帝国主義は相対的に「地位」を上げてきた。ここには、帝国主義間の経済発展の不均等性と相互対



第二次大戦終結まで
第二次大戦を前後する時期に、既に核開発は、米、ドイツ、英国、ドイツなど

急激に進行する核武装化

歴史的にみた現在の位置づけ

の帝国主義諸国で始められていた。

大戦中、連合国側であるドイツは積極的に核兵器開発に着手し、それに脅威を感じた英国は、独自の開発を中止し、即刻米国の核兵器開発に援助する体制にきりかわった。しかし、英国の予想に反して、ドイツ、日本の核兵器開発は未完成のまま大戦終結を迎えた。

一方米国は、一九四一年十二月六日(真珠湾攻撃の前日)、開発を前向きに進めることを決定し、暗号名「マンハッタン計画」で核兵器開発を開始した。開発の中心課題は、核兵器を作

るために十分な核分裂物質を即ちかなり純粋なU-235又はプルトニウム-239を製造する方法の開発にあった。そして、一九四五

年には、二発の原子爆弾に必要なプルトニウムと一発分の濃縮ウランが生産され三発の爆弾が作られた。一

発のプルトニウム爆弾は、ニューメキシコ州アラモゴ砂漠で実験が行われ、成功となつた。その成功にあきたらず米国は、さらにウラン爆弾を広島に

もう一つのプルトニウム爆

弾を長崎に投下し、史上空前の死傷者を出した。

第二次大戦はまさに、市場争奪を目的とした帝国主義戦争であったが、ここに核兵器開発の赤い糸がみえ始める。即ち、米

国は核兵器開発の「結晶」といえるべき原子爆弾を日本に投下することにより、核の脅威をみせつけ、日本を単独占領し、アジア侵略の拠点としたのである。

大戦後の核兵器開発
大戦直後から一九五〇年

初頭まで、米国の核兵器独占時代であった。しかし、

独占時代は長続きせず、ソ連が第一回核実験に成功した時点で、米国の独占時代は終わった。このようにして、両者が追いつき追い越そうとする米・ソの核競争(米・ソ独占)時代に突入した。

の争奪が激化している。また、西欧、日本の帝国主義列強は、米帝あるいは列強相互間でのあつれきを拡大しながら、米・ソの争奪戦に加わり、ソ連、西側帝国主義列強間の市場、勢力圏の再分割をめぐる「闘争」は、ますます先鋭化し、第三次世界大戦の危機が高まっている。



結した。その一方で、七〇年代後半からSALTの対象にならない戦域核戦力の分野での開発と配備に力を入れた。米国側では、パーシングII型IRBM(中距離弾道弾)・トマホーク(CLM)(地対地巡航ミサイル)・F-111(戦略爆撃機)など、ソ連側では、SS-1100型IRBM・バックファイア中程爆撃機などがこれにあたる。

その意図に反して、フランス・中国では研究が進められ、第四番目にフランスが、第五番目には中国が核保有国となった。その他に「潜在核保有国」としては、日本・西独などがあげられる。米・ソは、これ以上核の「拡散」が進まないよう、一見「世界平和」を行って行っているのが現実なのである。このことは、米・ソの驚異的な核兵器開発の現状をみても明らかだろう。

核兵器開発の現状
米・ソ両国は、六〇年代後半から七〇年代を通じて戦略核兵器の強化を進めながら、これを追認し相互にけん制する形でSALT(戦略兵器制限交渉)条約を締

結した。その一方で、七〇年代後半からSALTの対象にならない戦域核戦力の分野での開発と配備に力を入れた。米国側では、パーシングII型IRBM(中距離弾道弾)・トマホーク(CLM)(地対地巡航ミサイル)・F-111(戦略爆撃機)など、ソ連側では、SS-1100型IRBM・バックファイア中程爆撃機などがこれにあたる。

その意図に反して、フランス・中国では研究が進められ、第四番目にフランスが、第五番目には中国が核保有国となった。その他に「潜在核保有国」としては、日本・西独などがあげられる。米・ソは、これ以上核の「拡散」が進まないよう、一見「世界平和」を行って行っているのが現実なのである。このことは、米・ソの驚異的な核兵器開発の現状をみても明らかだろう。

核兵器開発の現状
米・ソ両国は、六〇年代後半から七〇年代を通じて戦略核兵器の強化を進めながら、これを追認し相互にけん制する形でSALT(戦略兵器制限交渉)条約を締

結した。その一方で、七〇年代後半からSALTの対象にならない戦域核戦力の分野での開発と配備に力を入れた。米国側では、パーシングII型IRBM(中距離弾道弾)・トマホーク(CLM)(地対地巡航ミサイル)・F-111(戦略爆撃機)など、ソ連側では、SS-1100型IRBM・バックファイア中程爆撃機などがこれにあたる。

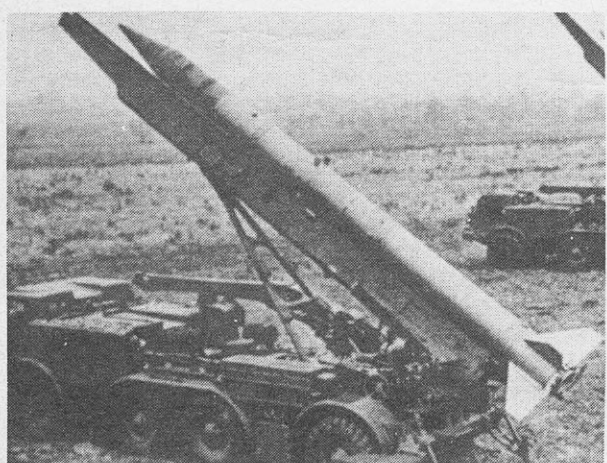
その意図に反して、フランス・中国では研究が進められ、第四番目にフランスが、第五番目には中国が核保有国となった。その他に「潜在核保有国」としては、日本・西独などがあげられる。米・ソは、これ以上核の「拡散」が進まないよう、一見「世界平和」を行って行っているのが現実なのである。このことは、米・ソの驚異的な核兵器開発の現状をみても明らかだろう。

核兵器開発の現状
米・ソ両国は、六〇年代後半から七〇年代を通じて戦略核兵器の強化を進めながら、これを追認し相互にけん制する形でSALT(戦略兵器制限交渉)条約を締

結した。その一方で、七〇年代後半からSALTの対象にならない戦域核戦力の分野での開発と配備に力を入れた。米国側では、パーシングII型IRBM(中距離弾道弾)・トマホーク(CLM)(地対地巡航ミサイル)・F-111(戦略爆撃機)など、ソ連側では、SS-1100型IRBM・バックファイア中程爆撃機などがこれにあたる。

その意図に反して、フランス・中国では研究が進められ、第四番目にフランスが、第五番目には中国が核保有国となった。その他に「潜在核保有国」としては、日本・西独などがあげられる。米・ソは、これ以上核の「拡散」が進まないよう、一見「世界平和」を行って行っているのが現実なのである。このことは、米・ソの驚異的な核兵器開発の現状をみても明らかだろう。

核兵器開発の現状
米・ソ両国は、六〇年代後半から七〇年代を通じて戦略核兵器の強化を進めながら、これを追認し相互にけん制する形でSALT(戦略兵器制限交渉)条約を締



地対地ミサイルブロッグ-7